

No. **13**
2004.Feb.



イベント学会 設立5周年記念 東京大会

イベント・オリエンテッド・ポリシー

CONTENTS

- ◆プログラム／開会挨拶 成田豊 P2
- ◆基調講演 P3
『イベント・オリエンテッド・ポリシー』堺屋太一
- ◆テーマ発表1 P4
『産業化するスポーツイベントのJリーグでの検証』間宮聡夫
- ◆テーマ発表2 P5
『イベントとしての音楽ビジネス』内野二郎
- ◆テーマ発表3 P6~7
『イベントファンドがもたらすニュービジネスの可能性』
亀田卓・浜崎正信／懇親会
- ◆特別報告 『動き出した2010年上海世界博覧会』葉華 P4~5
- ◆特別企画 イベント学会5周年のあゆみ／イベント大学 P8~9
- ◆学会員リレーエッセイ P10~11
『イベントの力=「多事多縁」と「集团的創造」』岩崎博
- ◆インフォメーション P12



イベント学会会報「イベントロジー」
EVENTOLOGY

設立5周年記念 東京大会 プログラム

2003年11月12日、イベント学会設立5周年記念東京大会が、汐留の電通ホールで開催された。今回のテーマは「イベント・オリエンテッド・ポリシー」。スポーツイベントの産業化、イベントがもたらすニュービジネスの可能性、また、2010年開催に向けて動き出した上海世界博覧会からの報告など、多彩な論点から発表がなされた。

10:00 開会挨拶

成田豊 イベント学会理事長

10:10 基調講演

『イベント・オリエンテッド・ポリシー』

堺屋太一 イベント学会会長

11:00 テーマ発表①

『産業化するスポーツイベントのJリーグでの検証』

間宮聡夫 イベント学会副会長

11:40 テーマ発表②

『イベントとしての音楽ビジネス』

～三大テノールからサザンオールスターズまで～

内野二郎 (株)ミュージックリーグ会長

13:20 テーマ発表③

『イベントファンドがもたらすニュービジネスの可能性』

亀田卓 (株)電通 エンタテインメント事業局

浜崎正信 (株)ハマーズ 代表取締役

14:40 特別報告

『動き出した2010年上海世界博覧会』

葉華 (株)野村総合研究所 主任コンサルタント

15:20 全体統括

堺屋太一 イベント学会会長

15:50 閉会挨拶

望月照彦 イベント学会副会長

16:00 懇親会

18:00 散会

イベント学会とは

イベント研究者のみならず、さまざまな分野の研究者、技術者、専門家や実務者が経験や知識の多少にかかわらず参加し、積極的な相互作用を通じて「異質な知と技能のメルティング・ポット(るつぽ)」となる学会です。

多様な専門、異なった立場から提示される知識、ノウハウ、経験がときに競合し、干渉しあい、やがてそれらが共鳴・交響して、創造的に共同成果を生み出すような機会と場を創り出すこと、それこそがわれわれのめざす新しい学会です。

開会挨拶

イベント学会理事長 成田 豊 氏



今から20年前、当時の通商産業省が、研究者や専門家による「イベント研究会」でイベントの未来像を議論しました。

それから10年後の1998年、イベント研究会の座長だった静岡文化芸術大学学長の木村尚三郎先生を初代会長として、有力な研究者、専門家に声をかけ、世界最初の「イベント学会」を設立してから満5年になります。

そこで今年度は5周年記念事業を行うことになり、記念大会会場に電通ホールを選んで頂いたことを、電通会長として誠に光栄に存じます。

今年ご入会頂いた方を含め、現在イベント学会は、個人会員220名、準会員60名、法人会員41社、自治体会員3団体で活動し、本年度の研究活動としては、本記念大会の他に、6月に順天堂大学で2003年度研究大会を開催、10月からは多摩大学と共催で「イベント大学」を開催しています。さらに記念出版として堺屋会長が「イベント・オリエンテッド・ポリシー」を執筆される予定です。

本日会場にお集まりの皆様は、21世紀の「イベント学」を創り出す現場に立ち会っているのだという視点でご高聴頂ければと思います。



■電通新本社ビル

イベント・オリエンテッド・ポリシー

本大会のテーマ「イベント・オリエンテッド・ポリシー」は、堺屋会長の名著のタイトル。それは、長い間、日本のイベントの道しるべとなった。本大会には、21世紀の新しい道しるべを示していく決意がこめられている。

イベント学会会長
堺屋太一 氏

■ 知価社会の利益の源泉

知価時代、知恵の値打ちの社会におけるイベントとは、いかにあるべきか。工業社会から知価社会に転換したことで、イベントの効果と必要性は、どのように変わってくるのか。そして、イベントを黒字にしていこうためには、どのような条件が必要なのか。こんなことについてお話を申し上げたいと思います。

従来の工業社会では、値打ちは労働力にありました。だから、労働力の投入量が、基本的にモノの価値になる。経済学では、価格が変わっても、価値は変わらないことが大原則です。ところが、知価社会では、値打ちは知恵にある。このような社会の最大の特徴は、コストと価値が一致しないことです。

たとえば、日本で売っている絹のブランド・ネクタイの多くは中国製です。生産コストは、輸送費などを含めてもせいぜい300円。ところが、高級ブランド品は2万円。売値とコストの差額、これが知恵の値打ちです。ところが、ブランド品も流行を過ぎればバーゲンになり、元の高い値に戻ることはない。つまり、知恵の値打ちは、値段ばかりか価値そのものが変わるのです。

知価社会は、まさに社会的主観によって、消費者の満足度をいかに高めていくかという社会。消費者の満足度こそ価値だと断言できる社会です。「こういうブランドが高級なんだ」「こういうものは高いんだ」といったソーシャルフィールドにおいて価値が実現していく。社会的条件、心理的条件、意図的につくられた非日常的条件下で価値が大きく左右されることもあります。

■ 知価社会のイベント

ところで、イベントの基本的な定義は、「意図的に非日常的な社会状況を生み出し、これによって人間精神を作興し、社会主観を変更するために企画された一連の行為」といえるでしょう。知価社会では、非日常的な社会環境(イベント)が、モノの価値を吊り上げる大きな効果をもつようになってきました。

このため、供給側は非常に高いコストを使って、非日常的条件を生み出そうとするわけです。だから、イベントそのものが価値創造的でなくてはならない。今後は、入場料はもちろん、物販、知的財産権、広報権などの比重が高まってくると思います。イベントの発想を「必ず儲からないといけない」「儲かるだけの価値創造ができればいけない」という風に変える必要があります。

イベントの重要な効果は、実物実験にあります。「祭」を例にとれば、人々はちょっと脱線する。普段は、「こんなもの着られない」「こんな踊りはしない」という人が、お祭なら着る、踊る、頭から網をかぶったり、顔に泥を塗ったりもする。このような非日常性をいかに演出するかということです。技術的冒険、芸術的挑戦、それを何千人、何万人もの人が体験する。この効果は絶大です。

現在は、工業社会とは正反対に、賃金の低い国、途上国に資本装備率の高い産業が集まり、賃金の高い国にデザインや技術開発や金融操作など労働集約的な産業が集まっています。日本も、高賃金の労働集約的産業が集まる国にならなければなりません。それ以外に経済低迷から構造的に抜け出す道はない。大胆なイベントによって、意識改革や社会説得をしていくことが、イベント学会に課せられた責務だと思っています。

■ Profile ■

1935年大阪生れ。東京大学経済学部卒業後、通商産業省入省。日本万国博覧会を担当、沖縄海洋博を手掛けた。1962年通商白書では「水平分業論」を展開し、世界的に注目される。1978年に退官。作家として「油断!」「団塊の世代」「平成三十年」「峠の群像」などを執筆。(財)アジアクラブ理事長、国会等移審議会委員、政府税制調査会委員などを歴任。1998年7月より2000年12月まで経済企画庁長官を務める。現在、東京大学先端科学技術研究センター客員教授。

産業化するスポーツイベント のJリーグでの検証

間宮聰夫 氏

スポーツを競技としてだけでなく、商品として捉える。それが私の研究領域で「スポーツイベントの産業化」と表現致します。

Jリーグは'93年の誕生時からその片鱗が伺えました。選手の派手なパフォーマンスや本格的フランチャイズへの挑戦で、スポーツの場を「道場」から「劇場」へ移し、入場料、協賛金、放送権料で巨大市場を創造しました。

しかしスタートから4年が経つとブームが沈静化、Jリーグにおける全ての収入は著しく低下しました。社会現象化した日韓W杯後、テレビ視聴率はほとんど伸びず、観客動員数も、わずか2週間で元に戻ってしまいました。

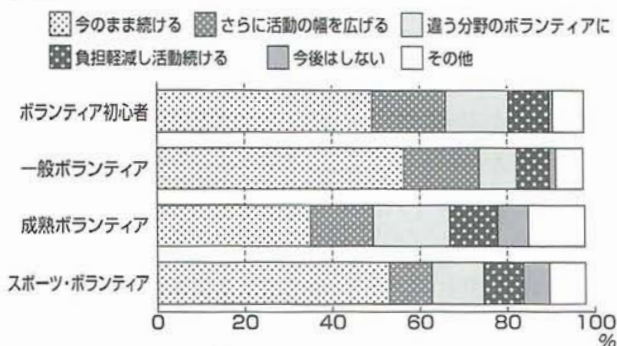
一方で常に多くの観客を集め、成功を収めているチームがあります。設備を自治体がサポートし、地域住民が積極的にボランティア参加する鹿島アントラーズ。地元メディア河北新報社とのコラボレーションで、4年連続の単年度黒字を誇るベガルタ仙台。年間シートを4,000人もキャンセル待ちをしている浦和レッズ。その他にもありますが共通する特徴は2つです。地元自治体・メディア・企業の理解と積極的参加。そしてボランティアの協力体制が整っていること。いわば住民ひとり一人の「オラが町のスポーツイベントだ!」という高い意識です。

こうした意識を促し、Jリーグを地域に密着させればスポーツイベントとして必ず産業化できます。

【まみや・としお】

イベント学会副会長。スポーツ産業学会理事。日本大学大学院、鹿屋大学等で客員教授。1958年、電通入社。マスメディアを駆使した数多くのビッグイベントを手がける。1991年、東京で開催された世界陸上選手権では現場責任者として活躍。

■ボランティアの継続意志



動き出した2010年上海世界



2010年に開催が決定した上海世界博覧会は、20年程前の、堺屋会長と北本副会長の提案に端を発します。当学会とは深い縁があるわけです。

開催期間は5月1日から10月30日の6カ月間で、テーマは“Better City, Better Life”。様々な意味で、今世紀は“都市”がキーワードになる。これがテーマの由来です。

窓口は、政府機関である上海世界博覧会事務協調局で、上海市の副市長が局長を兼任します。市政府が博覧会の運営に直接関与し、サポートしていくわけです。スポンサーも各種広範囲の募集が計画されています。

イベントとしての 音楽ビジネス

内野二郎 氏 (株) ミュージックリーグ会長

【うちの・じろう】

1927年生まれ。キョードー東京創始者。ビートルズ、レッド・ツェッペリン、エルトン・ジョン、ニニ・ロッソ、ポール・モーリア…。外国人アーティストの公演プロデュースの草分け的存在。音楽を通じたチャリティコンサートも数多く手がける。「ラジオ・チャリティ・ミュージックソン」は、昨年で29回目を迎えた。2002年には横浜アリーナで3大テノールのラストコンサートをプロデュース。

3大テノールをやる前までは、「ストリッパーからビートルズまで」が僕のキャッチフレーズ。国内外のあらゆる分野のアーティストの興行をし、いろいろなことを学びました。

僕は、何か人の役にたつ仕事がしたかった。ラブ・サウンド・シリーズで儲かった時は、チャリティ番組をやろうと、ニッポン放送に24時間枠を買いに行きました。ラジオ法などの問題で断られたが、強くお願いして実現しました。最初は制作スタッフは面倒がり、大喧嘩しましたが、放送したら視聴者から電話が殺到して、同局の社長以下、全員が電話とりをした。最後は、みんな涙を流して感動しました。そんな

ことがあって「ミュージックソン」は29年間も継続しているのです。

舞台製作も大好きです。コンサートの空席に600本のバラをまき、途中で客席に配る演出をした。アジアのアーティストを集めた「バックス・ムジカ」では正三角形ピラミッドの舞台装置で「政治と経済と文化が平等に並ぶことで平和がある」と示唆した。3大テノールの時は、舞台に幅50mの風呂屋の富士山の絵を飾った。突飛なことばかりやるから、「夢みる男」「クレージー内野」と言われます。

僕は農家の出で、音楽業界のことがわからなかったの、自分なりのやり方をしようと思ったのです。全国組織のキョードーグループは、興行の裏の世界を知らないから作れた。これは、世界にもないシステムでした。

思ったことをやってきたことが、50年もビジネスをできた要因ではないでしょうか。



▲コンサートの日には内野氏の誕生日だったので、打ち上げの時、3大テノールがハッピーバースデーを歌ってくれた。



博覧会

葉華 氏

開催に向けてのスケジュールは、まず、2005年までが準備期間。続く3年間で第2段階として、プロモーションや展示、ビジネスの誘致、実際のパビリオン建設に充てられます。2008年には北京でオリンピックが開催されますので、ここでの経験をフィードバックしたテスト運営が最終段階です。

現地は、大成功をおさめた大阪万博に“追いつき追い越せ”の熱気に溢れ、中国政府や上海市政府の、博覧会成功への強い意志を感じます。様々なビジネスチャンスが生まれるであろう上海世界博覧会に、ぜひ、ご協力をお願いいたします。

■Profile■

1961年生まれ。工学博士(都市計画)。専門は都市計画、地域計画、都市形成史。1998年より、野村総合研究所主任コンサルタント。アジア各国の大型観光・レジャー開発プロジェクト企画、基本計画、フィジビリティなどの研究活動を手がける。



イベントファンドがもたらす ニュービジネスの可能性

亀田卓 氏

前回の研究大会でもお話ししましたが、米国の歌手ベイベーフェイスの日本公演や日韓W杯のパブリックビューイング、日中国交正常化記念イベントといったイベントの証券化を、日本で初めて実施しました。

前例がないため、スキームづくりに苦労しましたが、「ベイベー〜」と「パブリック〜」は無事成功。「パブリック〜」では、1カ月半で7.9%の利回りをつけられました。ただ、日中国交イベントではアクシデントもあり、投資金額の6割しか償還できませんでした。

失敗しましたが、制作者は「前払い金の調達」「投資家がイベントを盛り上げる」、投資家には「ハイリターン期待」「パトロネージュ気分が得られる」等のメリットがあることを確認できました。その後、浜崎さんを始め、次々と証券化する動きがあり、「火が消えなくて良かった」と思っています。

【かめだ・たかし】

(株)電通エンタテインメント事業局所属。1984年電通に入社し、テレビの仕事を中心に、コンテンツビジネスに関わった後、金融関係の業務に携わる。2001年、出向の形で、東京ファイナンス・アンド・エンタテインメントを設立し、イベント証券化事業に取り組む。

亀田 今回の証券化で問題だったのは？

浜崎 まずは、マーケティングの問題ですね。ブランドに頼り過ぎ、結局、お客様が見たいと思うものを作りきれていなかった。

亀田 僕も以前、日中国交正常化30周年の記念イベントでは、金融庁の説得に気を取られ「どれだけ見たい人がいるか」という観点が抜けていた。

浜崎 日本はまだ直接金融に慣れていませんから、営業者は最後まで責任を問われます。しかし、私どもにも、「投資家がリスクをとるんだから」という甘えがあった。

亀田 エンタテインメントの世界では金融の世界の論理が分からない人が多いですね。



懇親会

学会大会終了後、設立5周年記念懇親会が開催されました。まず堺屋会長の挨拶。つづいて李南植韓国国際文化イベント学会会長、西原寿之日本イベント産業振興協会常務理事から挨拶を頂きました。今後は、イベント業会の4団体、さらに韓国の学会とも協力体制を整えていくそうです。乃村義博副会長の音頭で、乾杯！ その後は、懇親会のメインイベント。野村万之丞理事がプロデュースした大田楽です。華やかな衣装のダイナミックな踊りと見事な曲芸で、会場内は拍手と歓声の渦。北本副会長の中締めで、会は終了。年々盛り上がりを見せる懇親会。来年も楽しみです。

▼見事、成功！ 野村万之丞氏プロデュースによる大田楽が会場を沸かした



最近、注目を集める「イベントファンド」。事業者には「前払い金が調達できる」「リスク回避」、投資家には「ハイリターンの期待」「パトロン気分が楽しめる」メリットがある。日本ではまだ珍しい試みに挑戦した亀田氏と浜崎氏が、現状の問題点と今後の可能性を語った。

浜崎 今後挑戦する方は「投資家の自己責任はない」と思い、儲かるイベントを企画して投資家にお返しすることを考えるべきです。

亀田 今後、イベントの証券化が成功する鍵は「プロデューサー」ですね。アイデアを持ち込む人は多いが、事業計画書が何もない。



イベントファンドによって実施された「ジュラシック・パーク・インスティテュート・ツアー」



浜崎 確かに若手のプロデューサーとお会いすると、基本的な勉強不足を感じます。

亀田 自分のやりたいことをやるなら芸術家でもいいが、他人のお金を使うならビジネスマンでなければ困る。作品を「商品」と考えて、プロデュースすべきだと思います。

浜崎正信 氏

エデュテインメントをテーマに、映画『ジュラシック・パーク』の世界を再現した「ジュラシック・パーク・インスティテュート・ツアー」。昨年の7月から約3カ月間開催したこのイベントは証券化で実施しました。一口50万円で資金を募り、興行や物販などイベントの収益を投資家に分配する仕組みです。

亀田さんと同じく匿名組合契約を用い、法務体制や監査体制など事後の管理体制を万全にしてから公募。銀行等の信用補完は得られませんでした。多くの方のご支援をいただき、15億円があっという間に集まりました。

ただ来場客の80万人相当が損益分岐点でしたが、結果は半分以下。残念ながら、投資家の方に投資資金の30%以下しか戻せない予定です。以後、福岡や愛知万博でも同様のイベントを開催します。その収益を投資家にお返すことが営業者の責務と感じています。

【はまさき・まさのぶ】

(株)ハーマーズ代表取締役。1984年日興証券に入社。その後、クレディスイス・ファーストボストン証券金融開発部長。数々の金融商品の開発に携わる。1995年より日活の再建をサポートした後、1999年ハーマーズを設立し、イベント証券化事業に取り組む。



▲音楽と舞と衣装が、会場を一層華やかに

▼会場のあちこちで活発な意見交換も



▲懇親会も5周年を迎え、例年以上に盛り上がった

1998年に産声をあげたイベント学会。

この5年間、さまざまな活動を実施してきた。

次の5年、次の10年へ向かう前に、その軌跡を辿る。

1 イベント学会設立

「理性と情感、論理と直観、イメージと行動など、人間や社会のもつ多元性や複雑性、不確定性を認めつつ、自ら関わり合い、新しい価値を創りだしていく知と、そのプロセスを追う学、つまり『臨床の知』あるいは『デザインの知』を求め、止まることのない創造をくり返す。それが『イベント学=Eventology』である」。木村尚三郎氏を会長にイベント学会が設立された。

前イベント学会会長・木村尚三郎氏▲



最初の学会大会は横浜で開催

年1回、イベント学会が、地域住民と膝をつき合わせて、「イベント」「地域振興」について語り合う『イベント学会大会』。記念すべき第一回の学会大会は神奈川県横浜市「パシフィコ横浜」を会場に、華々しく開催された。木村尚三郎氏による基調講演からはじまり、記念シンポジウムでは井関利明氏（慶應義塾大学教授・当時）がコーディネーターを務めた。



▲「イベントが拓く21世紀」と題し、熱い討論が交わされた

5 大阪で50万3000人を動員！

第3回にして、イベント学会大会は初めて関西で開催。「国際集客都市」を目指し、名物、名所、名人が多い大阪の地から「イベント名人」を輩出べく、2日間に渡って、講演、フォーラム、街塾などを催した。またミレニアム記念イベントとして、大阪城公園に巨大電飾ツリーを設置。市民参加のライブイベントも開催し、10日間で50万3000人を集めた。



▲イベント学会ではなくイベント“楽”会とし、楽しく学ぶスタイルを実践した



▲交流懇親会では、夜の大阪城をバックに和太鼓の演奏も



▲星空を繋ぎ合わせたようなツリーには、多くの市民から感嘆の声が漏れた

イベント学会 沿革・活動略歴

- 1998年 3月 イベント学会設立
会長 木村尚三郎（東京大学名誉教授） 1
- 1998年 11月～翌3月 イベント大学
—スポーツイベント学講座—
- 1998年 12月 98年度イベント学会・横浜大会
—イベントシティの創造をめざして— 2
- 1999年 6月 99年度研究大会
—イベントが拓く21世紀—
- 1999年 9月～翌1月 イベント大学・浜松講座
- 1999年 12月 99年度イベント学会・浜松大会
—起街家時代を拓く・人が人を集めるタウンイベント— 3
- 2000年 6月 00年度研究大会
—デジタルネットワーク時代におけるイベントの可能性— 4
- 2000年 12月 00年度イベント学会・大阪大会
—世界迎賓都市OSAKAを築く— 5
- 2001年 6月 01年度研究大会
—新世紀イベントを創造する・飛躍する21世紀イベント—
- 2001年 8月 01年度イベント学会・多摩大会
—タウンコミュニティの再生とイベント・新たな伝統の創造と地域文化の創出— 6
- 2002年 7月 02年度研究大会
—イベントの文化経済学—
- 2002年 7月 役員改選 会長 堺屋 太一
- 2002年 11月 02年度イベント学会・東海大会
—大交流時代におけるまちづくり・地域づくりとイベントの活用— 7
- 2003年 6月 03年度研究大会
—21世紀イベントの可能性を探る—
- 2003年 12月 設立5周年記念東京大会
—イベント・オリエンテッド・ポリシー—

6 多摩に生まれた新しい「祭り」

オールドタウン化が深刻な東京・多摩ニュータウンが2001年の学会大会の開催地。NPO団体の多摩ニュータウン再生機構と多摩ニュータウン学会が企画した祭り「リボンフェスタ多摩」をイベント学会がバックアップした。以降、リボンフェスタは毎年開催。多摩地区の新しい祭りとして、近隣からも多くの人を集めている。



▲シンポジウムのテーマは「タウンコミュニティ再生とイベントづくり」



▲富山県八尾町の優雅な「おわら風の盆」をリボンフェスタの踊りとして採用



▲当日は約1万人の参加者を集め、大変な賑わいが生まれた

3

浜松市民と一緒にイベントづくり

第2回学会大会は、再開発が進む静岡県・浜松市で開催された。多くの世界的起業家を輩出したこの街から「今度は起“街”家を育てよう」と提案。各種講演、シンポジウム、地域住民と酒を酌み交わしながら語り合う、街塾などを実施した。さらに浜松駅前を舞台に「光と音による演出」をテーマに、市民参加型の街頭イベントも催した。



▲会場は、新しい浜松のランドマーク「アクトシティ」と駅前広場



▲デザイナーでイベントプロデューサーの山本寛斎氏も講演



▲街頭イベントには多くの市民が参加。鮮やかな音と光に酔った

IT はイベントをどう変えるか？

4

IT革命という言葉が飛び交った2000年。「デジタルネットワーク時代におけるイベントの可能性」と題して、研究大会を催した。ITの普及により急激に変化する社会環境を見据えつつ、各界の第一線で活躍する研究発表者が、イベントの未来像を探った。



▲「時間と場所の制約から解放された新しいイベントが生まれるのでは？」。イベントの未来は明るい

7

愛・地球博を目前に...

2002年の学会大会は「2005年日本国際博覧会(愛・地球博)」を目前に控えた愛知県名古屋市で開催された。東海三県の市民はもちろん、新聞社や、地元企業のスポンサーなど、多くの協力を得て、さらにスケールアップ。中でも、東海三県の市民6チームが「まちづくりプラン



▲鈴鹿市・寺家の女性たちによる「緑側サミット」の提案

ディング」の企画提案をしたワークショップは大変な盛り上がり。多くの提言もなされ、実り大きな大会となった。



▲シンポジウムには、中部経済連合会会長・太田広次氏、愛知県副知事・長谷川信義氏、タレント城戸真亜子氏などが参加

イベント大学

イベント学会主催のオープンカレッジ「イベント大学」。今回は2003年10月3日～12月5日の間、多摩大学大学院との共催により、渋谷マークシティ17階にある多摩大学大学院ルネッサンスセンターにて、「地域経営とイベント学」をテーマに開講された。

計10回に渡った講義には、長野県小布施町のまちおこしに成功した小布施堂社長・市村次夫氏をはじめ、毎回多彩なゲスト講師が参加。それぞれの現場での実体験を踏まえた講義で、受講者を大いに魅了した。



■10回を通して講座主任を務めた望月照彦氏。含蓄とウィットに富んだ講義に、受講者全員が引き込まれた

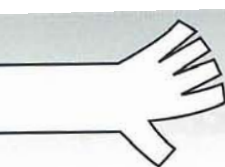
最終日の12月5日には、「イベントは何を創れるか」という表題で統括シンポジウムを開催。受講者各自が、自ら立案したまちおこしイベントの企画を発表、それに対してイベント学会副会長の井関利明氏(千葉商科大学教授)と望月照彦氏(多摩大学教授)、そして理事の宮木宗治(日本イベント産業振興協会 調査・研究本部本部長)が意見を述べる形で進行された。「FESTA

NEXT GO! GO!」と題された豊島区に住む55歳を対象とした同窓会イベント、蔵の街と基地の街という二面性を持つ福生をひとつにする「FUSSA BBQ CONTEST」など、ユニークな企画が目白押し。ここから新たな名イベントプロデューサーが生まれそうな予兆が見られた。



■「新しい人間学としてイベントロジーはある。今回の講義を通して『何かやりたい』と思ったならば、それはすでにイベントなのです」。感動的な言葉で締めくくった井関利明氏





イベント雑感

第2回

イ	ベ	ン	ト	の	力	=													

『多事多縁』と『集団的創造』

岩崎 博

学会員が、イベントまたはイベント学に関して日々思うことを提言していく『イベント雑感』。
第2回目となる今回は、イベント学会会員で、有限会社エスシー・プランニング・オフィス代表の岩崎博氏より、「イベントが現在の私達の社会にもたらす力」について、寄稿していただきました――

かねがね「イベントとは目的を達成する手段である」との定義(?)には釈然としない思いを抱いてきました。

イベントは集団的な創造活動ですから、集団に動機を与え、行動への意志を束ねる「目的」が重要であることは自明です。何も「それは違っている」というつもりはありません。

しかし、「イベントは手段である」というのは、イベント固有の特性を何ら示してはいません。また、目的と手段というのは階層的な関係にある相対的な概念であり、本来イベントは手段であると同時に目的としての機能を内在しているはずで

す。ここではこうした疑問から、イベントが現在の私達の社会にもたらす力について、私自身の思うところを述べます。

まずあげたいのはイベントの『縁』を起こす力です。私は個人がいまの社会を生き抜くキーワードとして『多事多縁』という言葉をよく使います。『縁』とは人が生きていくうえで欠かせない、「安心」と「希望」を支える人間の帰属関係のあり方を指すものです。地縁、血縁、職場縁とい

った全人格的な帰属集団の有効性が低下していくなかで、人は部分的な人格を帰属させる『多くの縁』をもつことで、「安心」と「希望」を、「日々の楽しみ」を得ようとしています。多くの新しい事に関われば多くの縁が生まれ、広がっていきます。

イベントという限定的な『事』に試みに参加するなかで新たな『縁』を広げる……。私はそこにイベントの一つの可能性をみています。コンベンション、パーティ、バザー、フリーマーケットなどの『縁起イベント』に注目です。

と同時に、こうしたイベントを評するにあたり、「手段なのか、目的か?」という二項対立の論点整理が、私には、なじまないのです。

次にいきます。私はイベントの基本的な特性は『集団性』にあり、「集団への帰属を共通感情として分かち合う」イベントの力に着目すべきと考えています。何らかの価値観や嗜好を同じくする『集団』が、価値観をシンボリックに表現した時間・空間(イベント)をライブに共有し、高揚する共通感情のなかで、自己と帰属集団との関係をお互いに発見しあうといったシナリオはイベントならではのものでしょう。

岩崎 博 (いわさき・ひろし)



有限会社エスシー・プランニング・オフィス代表。イベント学会会員、合意形成研究会会員。演劇〜雑誌〜イベント〜Webサイトと、表現のあり方は異なりますが、継続的に「集団的創造とプロセスマネジメント」に関心の対象にしています。今年は実践的な議論の場を広げていきたいと考えています。

遠くは古代国家の祭礼、近くはナチスの党大会などにその証明を求めることができますが、その話はさておき、集団の共通感情をいかにマネジメントするかは、きわめて今日的で重要な課題と考えます。書店にはファシリテーションやコーチング、ネットワーキング、合意形成といった「グループマネジメント」に関連する書籍がたくさん並んでいます。

誕生パーティからスポーツ大会、企業行事、地域の祭、国際イベントにいたるまで、あるいはキャンペーンなどのマーケティング活動においても、「共通感情を分かち合うグループマネジメントとイベントの力」はますます重要な取組課題となっていくはずで。

イベントならではの『集団的創造』についてもひとこと述べます。創造活動というのは、あらかじめ決まった設計図にもとづく製作ではなく、制作に向かっているプロセスそのもののなかで湧きあがり、全体像が浮かび上がってくるという側面を強くもちます。少なくとも目的に向けた効率的生産活動とは異なります。創造活動とは不断の自己変革、自己創造であるともいえます。集団の自己変革を促すイベントの力に期待がかかります。

私はイベントにおけるマネジメントの要諦は、目的に向けて設計図どおりに合理的な判断を積み重ねるよりも、創造のプロセスを上手にコントロールすることと思っています。創造のプロセス(イベント準備)のなかで共感が生まれ、隠された本質の目的を発見することは珍しくありません。

集団の自己変革を促す集団的創造活動＝イベントのマネジメントは、私の研究テーマです。詳細な内容は別の機会に。

以上、要点は「手段」といわれるイベントそのもの、あるいは制作プロセスに内在するイベントの豊かな魅力や可能性などの力、そしてプロセスそのものを重視するマネジメントの重要性と課題です。

昨年は、劇作家・評論家の山崎正和氏の『社交する人間』(中央公論社)が話題となり、私も大きな示唆を得ました。それからの引用で話を終えます。「行動には目的と方法、目的と実現過程の二側面がある。そして前者が支配的であるときは功利的な行動が、後者が独立したときには遊戯的な行動が生じる。この遊戯的な行動が社交をもたらす」

この「社交」が具体的な形となったものが「イベント」と考えていいでしょう。

『イベント雑感』への寄稿募集中

このコーナーでは、学会員のみならずの寄稿を募集しております。「イベント学会への提言」「わたしとイベント」など、イベントまたはイベント学会に関してあなたが思われていることを2000字(400字詰め原稿用紙5枚)程度でまとめ、住所、氏名、年齢、電話番号を明記のうえ、下記の宛先までお送りください。なお、掲載文は一部手直しさせていただく場合があることを、ご了承ください。

宛 先

〒102-0082

東京都千代田区一番町13 (一番町法眼坂ビル3F)

「イベント学会事務局・EVENTOLOGY

『イベント雑感』係」

FAXは 03-3238-7834

イベント学会理事・監事選挙のお知らせ

現在のイベント学会理事・監事は、任期2年で2002年6月に選任されました。

本年6月の総会でその任期が終了し、新しい理事・監事を選任することになりますが、その手続きを進める選挙管理委員会が3月にスタート、その後おおむね下記の手順で会員にご案内する予定です。

(注) 理事・監事選挙は、イベント学会の個人会員・自治体会員・法人会員であって、2003年度会費を納付済みの会員だけが参加できるのでご注意ください。



新法人会員の紹介

法人名	会員代表者				
(株)朝日新聞社	事業本部長	橘 優	(株)テレビ東京	コンテンツ事業局長	井澤 昌平
(株)カトウスタチオ	代表取締役	加藤 賢次	(株)東京放送	執行役員事業局長	近藤 邦勝
(株)角川書店	代表取締役会長	角川 歴彦	(株)西日本新聞社	代表取締役社長	多田 昭重
(株)産業経済新聞社	営業局長	縣 良二	(株)日展	代表取締役社長	西 義信
(株)シミズオクト	代表取締役社長	清水 卓治	(株)日本経済新聞社	取締役文化事業局長	鎌田 真一
(株)セイムトゥー	代表取締役社長	加藤 勇二	(株)フジテレビジョン	上席執行役員事業局長	堀口 寿一
(株)ダイヤモンド社	代表取締役専務	松室 哲生	(株)フジヤ	代表取締役社長	永田 智之
(株)丹青社	執行役員IMC 事業部長	伊藤 芳晃	(株)北海道新聞社	東京支社広告局長	松岡 祥昭
(株)中日新聞社	東京本社広告局長	高嶋 孝次	(株)毎日新聞社	代表取締役社長	斉藤 明
(株)つむら工芸	代表取締役	浜田 晋	(株)ムラヤマ	専務取締役	古橋 和好
(株)テー・オー・ダブリュー	代表取締役社長	川村 治	(株)読売新聞東京本社	常務取締役広告局長	岩田 安弘
(株)テレビ朝日	事業局長	北村 英一			

※既存の法人会員について知りたい方は、事務局までお問い合わせください。

イベント学会入会手続き

- 1) 入会ご希望の方は、申込書（会員種別）にご記入の上イベント学会事務局あてご郵送下さい。
- 2) 申込者について理事会等で審議し、入会を承認された方には入会承認書と振込み案内をお送りしますので入会金（初年度のみ・準会員は不要）と年会費を指定の口座にお振込み下さい。
- 3) これ以降、会報『イベントロジー』や研究報告書、大会、部会などのご案内をお届けします。

■イベント学会会費一覧（2004年度/円）

会員種類	入会金	年会費	備考
1) 個人会員	5,000	10,000	個人
2) 準会員		2,000	大学生、大学院生、専門学校生など
3) 自治体会員	20,000	50,000	地方自治体
4) 法人会員（1口）	100,000	100,000	企業、団体などの法人